



安代の理集
[Signature]





麻新集

是とつゝまなむりしはを 鏡 小斎松風亭
 去らぬきり火くゝ穀とさやうり重
 東おきて未練の跡。大根うね、 白器
 豚汁をわくくゝあつゝ立派哉、
 赤あゝぬをほくもあゝゝ指し宿、 垂枝
 煮くゝも身を添てやゝ干菜うね、 三四
 木鬼のお名くゝ出ゝるまゝは森、 小里

竹くゝもおろくゝはる 吹雪うね 縮く
 うれて伏脚てゝかき居るうね
 吾さゝけき湯も終る氷けり 下松屋 鳳尾
 庭めくろくゝて足付やあゝりお、 佳木
 小まきゝるゝのあゝり中は啼、 夫、全 窮窓
 覚悟してあゝもかきぬゝをる 溪所 竹双
 主を枕のあゝるは寝やあゝる 堀江 来明
 冬くゝもたぬやゝ門は松梅く 法州 一松
 あゝ礪の白ひりぬゝ魚生海産哉

非亦たよ引よきり戸口うぬ
 文笑
 冬されや只一まの松分限
 水戸 美妻
 冬うきや冬さく人を吼る大
 松の葉枯ころきそ氷る山田う家
 會津 會里
 冬川氷松のうみぬ けらうきうき
 平野 併瓢
 炉冪や併冪人狭き紗うらひ
 龜毛
 松の雪き一蛇けりて岩きりり
 龜毛
 或は行や田舎歩りけ籠 磨
 入相えゆりて雪うら師走集
 、 、 、 、 、 、 、 、

冬川雪や雪うけてある雪の雪根、
 嵐峯
 冬うらうらや横よるそり演此有、
 文水
 廻板よ居りうぬる生海嵐うぬ、
 新南
 冬雪書を筆の先まを氷きり
 九、内 松岡
 船荷積うらふ忘るそり可難
 溜水
 冬此雪よ出たや、雪さよ雪の松、
 溜水
 冬川雪まなるぬ雪うらよあく鳥
 物也 不言
 横雪のうらたけみそそや能山
 月之
 冬うらうら積る雪ありか雪毎、
 、

葉をくちくちとむらりうれ聖なる 子治 名景

鴨のくちくちとむらり 下巻 子鶴

降とけし 常盤 雪谷

あつらふ 武家 梅山

水仙や鞠をけきかけのさし 寺 歌

大寺の傍四五人けき 本 三英

そり 本 三英

出る殿 武家 ちとせ

森つれぬ 本 三英

根おろし 本 三英

吹よせ 越後 栢

乾鮭 葛西 栢

炉 二合半 栢

十分 由丁 巢山

入歯 夫 桑風

足 夫 桑風

濱 夫 桑風

濱 夫 桑風

漸くも此次より 派長より
 知業や其物布の記きるまで 村松下 巢之
 三尺の門も跡さる 昔 盛山
 と 姑蘇 一日百も物中 一 善 月照
 収せし 夢の 先も 氷う 夢 玄圃
 裏所へ 出れと 氷お 田つ 了 陸居
 潜る 所 戸の あひて 吾も 夢う ぬ 危蹊
 引ふて 壺や 大根 跡長 籠
 ちり 壺や 掃箒を ちりぬ 船の上 中本 旗儀

夕靄の 後干 冬 跡 日南 の 那 伊予 蝶和
 夢を 念 佛 新 飯 喰よ 戻る 有り
 日南も ありぬ 壺の 指 の 籠 廣高
 冥極の人 壺 壺や と 跡 市 下谷 幽里
 あひ 形 壺の ぬ 壺の 壺う 壺
 門口を ちりて ちりぬ 壺 中 壺 林田 木丸
 壺う 降て ちりぬ 壺 壺 壺 壺
 足 壺う 壺 壺と 壺と 壺 押 人形 玉啓
 おく 壺 壺 壺 壺 壺 壺

高ふや野末の止、も終れ昔 川 壽月
 變の毛絲様、とくも、そ、う、あ、
 岩をてらま、は、よる、岩、う、あ、
 うれ木打やうぬ羽音そあれ、
 顔、ま、あ、ん、の、報、ひ、も、あ、り、ま、ま、
 溪、ひ、中、へ、年、高、の、ま、ま、十、折、成、
 と、一、折、内、は、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
 山、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
 ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、

〇七

湯口をよけて氷るや山根、
 ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
 い、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
 降、あ、り、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
 引、接、て、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
 里、神、木、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
 思、ふ、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
 野、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
 新、う、け、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、

〇八

子と母一里の線

印のまゝ一日たゝとれぬ柳葉

下保倉

踏水

摘するも洗ふもする根芥の

三幸

二三日田舎めつゝ

一鏡

羽虫とるも好寶する日永り

茅叶も生ふるも好裁きとる

小岩川

古朴

家屋を力まき河も流るる母と家
漁料の動蕪活流一補は意に
以厚志を種裁之が文細く
後之家内をめぐり社中へ
所心もするも世を去る

十言在何物教又此年口是純
一與之信一之之岩者杉屋意
一席之折うらう信神一之
海之風情よよとく一之
中如松杉之書を了る松屋
此月一之信をては信興と一

持一之一之趣多一之文句
を中一思一之信をた一之犬
取一之信一之信一之又信料
一之押一之信一之甲中一之信一之信
をた一之信一之信一之信一之信
あ一之信一之信一之信一之信

もの南人定白井の薬酒の味
い清酒家如酒人酒の強を
下高酒若くして清酒家
と程介やしの押あはす
事と雲根を果さんと大石
田新井始教言四十七人の

お不惟と志名式を討て
之審を憐む好む武を情
多しと元勝もゆる未代も
多しと何れもいふ酒を
酒の味も元と申ふ下
酒の味も元と申ふ下

勢い如神哉、高らるるに
あはれとて能あるれば
とて生由無きしよ
涯の名残をうんと
しよおのく
か

春の香をたし
とるよ
しよ
あはれとて能あるれば
とて生由無きしよ
涯の名残をうんと
しよおのく
か

吹雪の如く
本懐のまを
主税古倉
高を伸
厚く

山崎忠兵衛
代碼く厚氷

之の精
昭前
之體
其
也
之

おぼろしき月夜に
おぼろしき月夜に
おぼろしき月夜に
おぼろしき月夜に

三月十日

角面

おぼろしき月夜

おぼろしき月夜に
おぼろしき月夜に
おぼろしき月夜に
おぼろしき月夜に

おぼろしき月夜に
おぼろしき月夜に
おぼろしき月夜に
おぼろしき月夜に

おぼろしき月夜に
おぼろしき月夜に
おぼろしき月夜に
おぼろしき月夜に

おぼろしき月夜に
おぼろしき月夜に
おぼろしき月夜に
おぼろしき月夜に

おぼろしき月夜に
おぼろしき月夜に
おぼろしき月夜に
おぼろしき月夜に

くさくさ喰炭はきききも志世をき

松風亭

余のちよよきもまらぬ街のうら

巴水

山甲うき常のやうなり非を月

桃樹

水化またて醜る地もな

花鏡

葉のちよよきとれを匂ひき

泰令

誇るや老てけあもたのち一記

三割書 銚器

着陣の間も長一木の葉もき

本所 文水

柄も忘せきききり庵の門

白窓

下京や女業も川大根

弄泉

志すれやかきてておれ就き古井

ちよ

水の癖も枯葉も一葉もいさうに

旗儀

長きく水もみそ氷柱のれ

玉碧

飯汁も新くもあつてもあつても

廣高

水仙は屋根もあつてもあつても

子作 扇里

海を望み是して持よ小樽か
 万葉や接接ぬりのあふけりき
 牡丹をそ出よやえりる巻の口
 おつらうま潜戸出る夜中うれ
 灌佛やあふの差別もあひあ
 戸のまふお奥に犬の戻りり理
 むあくの咄をあれて持よ菜
 色あまを各札配くや新月

玉光
 空女
 つね女
 楽之
 乙也
 白海
 妻水
 路時

酒香ぬ振りよかすぬかーうれ
 こころあふさくあれと酒きり
 その捜すやう世田守のまをぬ
 手をさした舞度よりやとーの市
 ちりあうら古いのるる紙衣うま
 せめ言は汗あふぬーけさのあ
 よい風を等てみよる甲おき
 まこむるかこけさき月おあ
 葦指ら大の字ふのうーらうれ

相我
 菜菜
 何曉
 嵐十
 菜替
 琴清
 警旗
 巢羽
 良雅

集とくを評し 管と 亭一の 龍
のやまき おや白盤の 松花鳥
田一枚 了々 木三 了
節季いの 史編 連うて せきり
めくを する する 鷹お 羽者武
管よ 海ゆ されて 小一 時
向け 一も 一畠 あり 長命寺
管と 入 陣 くる くる 山の 空
落されて 池の あり 減り する

素人 佐藤 武雄 船志 管阿 亀月 氷航 為耕 松巢

川端よ ちるを 揃りて 夕す み
吹 花を 松の 何ひも 家さ
賞つれ くる 落き あり あり あり
人 おちを せぬ 音多 一 あり あり
今 鳴く 雛子と 違ふ 歌 あり
孫よ 知 あり あり あり あり
木 あり あり あり あり あり
法 壇 あり あり あり あり あり
ゆき あり あり あり あり あり

道隆 暁霞 聖果 陰水 四明 深谷 長峰 似藤 未成

新うあつて顔さうなり 里神樂 集居 一雜

拾ひもたえんておろや 雲水垣 八集 謝堂

天保四年己亥



天保四癸巳冬

麻苧集

巢居一雅